持続可能な社会システムの提案
～ 資本主義の再考 ～

社会システム研究家　尾崎 智仁

2014/11/08 国際交流センター 第１会議室にて

資本主義は持続可能な経済システムだろうか？

- 資本主義には様々な矛盾があり、持続可能な社会システムであるとは言えない。

- 合成の誤謬（ごびゅう）→ 矛盾が内在している
- 大量消費に支えられた経済 → 環境・エネルギー問題
- 無駄な仕事 → 利潤追求のための無駄な公共事業など
- 無駄な競争 → 市場、顧客の奪い合いなど（詳細は後述）
- 果てしない経済成長のノルマ → 持続可能ではない
- 財政問題 → 年金、医療費など、解決の目処が立たない

結論！　資本主義は持続可能なシステムではない！

対症療法か、根源療法か？

資本主義が、共産主義と同様に、持続可能なものでないなら、
政治家や知識人が議論していることは、沈みゆく運命の船の
延命措置のようなものでしかない。
つまり、対症療法でしかなく、根源療法ではない。

人類は、お金という紙切れや通帳上の
単なる数字によって滅亡の危機に貧し
ている。

世界の諸問題を根本解決するには、
資本主義とは違うシステムを創造して
いく以外に道はない！

私たちが乗り換えるべき、
新しい船の設計が求められている！

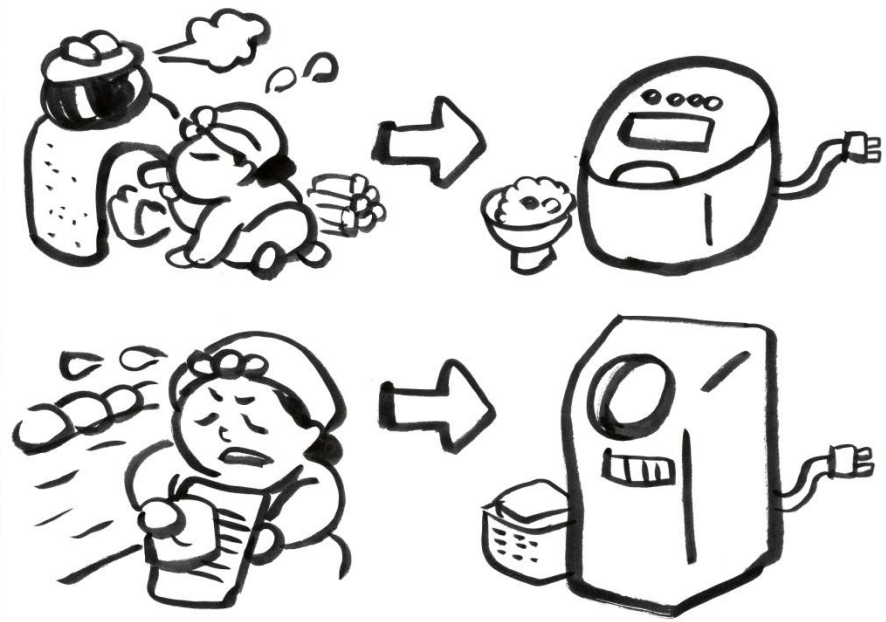
問題解決のヒントはどこにあるのか？

江戸時代に比べて家事労働は大幅に減り、短時間で終わるようになった。
それにより、私たちの家庭生活は劇的に楽に、豊かになった。

その理由は、インフラ整備や
便利な家電製品のおかげである。

しかし、社会での仕事はむしろ
忙しく、苛酷になっている。

その違いはどこにあるのだろうか？
私たちの社会の仕事も、家事労働の
ように、劇的に楽に、豊かになる可
能性はあるだろうか？



資本主義社会は無駄な競争が多い社会である

家事労働は、炊事、洗濯、掃除など、必要な仕事を済ませればそれで終わりで、それらを効率よく済ませることが幸福につながる。

しかし、資本主義社会では、仕事をわざわざ作り出してでも働いて給料を貰わなければ生活できないため、他の人の仕事を奪い合い、顧客を奪い合い、市場を奪い合い、権益を奪い合うといった競争が生じてしまう。

家事労働では、家族が仕事を奪い合わず、協力して仕事をする。

社会でも、無駄な競争をせず、協力して仕事をすべきではないか。

失業率が高いということは、裏を返せば社会で必要な労働力が充分に足りているということなので、それで困る方が不思議なのだ！

無駄な競争の例（１）

家や会社にいると、郵便局、○○宅配便、○○運輸といった流通業者が日本中を駆け巡り、荷物を運んでくる。

もし、それらの業者が１社になって効率化するならば、どれほどのガソリン消費が抑えられ、環境負荷が減り、道路の渋滞が緩和され、配達員、事務員の労働時間が大幅に削減できるだろう！

荷主が、同じ送料を支払うなら、計算上、配達員や事務員の給料を一切減らすことなく、労働時間を短縮することができるはずだ。
それは荷主にとってもメリットが大きい。

流通業者が顧客を奪い合うという無駄な競争をやめ、協力して荷物を届けるという方向にシフトすることにより、大きなメリットが生じる。

そうすると、「独占企業になり送料が高くなる」と反論されるが、その点が別の方法でクリアされれば問題ない！

無駄な競争の例（２）

Ａ社の生命保険会社のトップ営業販売員のＳ氏。
ライバル会社の顧客、1000人を自社の顧客にし、Ａ社に莫大な利益をもたらすとともに、高額な報酬で豊かな生活をしている。

彼がＢ社にヘッドハンティングされ、そこでも優秀な成績を収め、
ライバル会社の顧客、1000人をＢ社の顧客にした。

Ｓ氏の仕事は、彼の所属する企業にとってはメリットがあることだが、
顧客にとってはどこの保険会社でもさほど大きな差はない。
つまり、社会全体にとっては、S氏の仕事の必要性はあまりない。

それだけでなく、その間にＳ氏や各保険会社が営業のために消費した資源などを考えると、社会全体で見るならばマイナスであり、
Ｓ氏は貴重な人生を通じて、収入を得るためだけに、社会にさほど意味のないことをしてきたことになる。

資本主義社会はあまりに不公平な社会である

お金のおかげで、私たちは安心して分業をすることができ、自分の得意な仕事をしたり、何らかの社会貢献をすることによって、他の人の生み出した農作物、商品、サービスなど、様々なものを受け取ることができ、互いに豊かな生活を送ることができるようになった。

そうであるならば、私たちの社会は、社会貢献度が高い人ほど高い収入を得て、豊かな暮らしができるべきである。

しかし、現実はそうなっておらず、社会貢献度の指標であるべき「お金」をいかに効率よく、楽に稼ぐかが課題となっており、「お金を儲けること」が自己目的化している。

社会を見ても、大金持ちはむしろ社会に貢献しておらず、資産を運用したり、人を利用したり、既得権益からの利益であったりする。他方、介護職、製造業など、額に汗して働く人（社会に必要不可欠な人）の賃金が不当に低く抑えられていると感じる。

ここまでのまとめ

社会全体で必要な労働を、みんなで協力して済ませてしまおうという家事労働のような仕組みに変える必要がある。

失業率が高いということは、社会で必要な労働が既に足りているということなので、それで困るというのは、社会システムに欠陥があるということ。

無駄な競争がはびこる社会から、協力社会への移行が必要。

社会貢献度が高い人ほど、豊かな生活ができる仕組みづくりが必要。

お金は本来、私たちを便利に幸せにする単なる道具でしかないはず。

さあ、持続可能な経済システムとはどんなものかを考えてみよう！

資本主義に替わる新しい経済システム

資本主義とは違う持続可能な
社会システムを構築すべき。

無駄な競争がなく、協力して
社会の役割を分担すべき。

貧困がなく、公平で、シンプルで
住み良い社会であるべき。

バイオミメティクスという考え方

蚊の針の形状を模倣して、痛くない注射針が発明された。
このように、自然の叡智から学び、応用することをバイオミメティクスと言う。

お金は血液のようなものだとしばしば言われ、
景気の悪い状態を血液の循環が悪いことに喩えられる。

ならば、人体の循環システムを経済の仕組みに
応用すれば、お金の循環の良い経済システムが
構築されるのではないだろうか？

血液の循環を経済システムに応用しよう！

血液＝お金、細胞＝個人（国民）、臓器＝企業。

血液は全ての細胞に行き渡り、細胞は臓器などを構成し、人体に必要な仕事をなす。
細胞は人体を生かし、人体は細胞を生かす。
細胞の生存に必要な血液が循環される。

お金が全ての人に行き渡り、人は企業などを構成し、社会に必要な仕事をなす。
人は社会を生かし、社会は人を生かす。
人の生存に必要なお金が循環される。

個人に1つの電子マネー口座を与える

① 既存の紙幣、硬貨、銀行口座を廃止し、
個人に1つだけの電子マネー口座を与える。

細胞に栄養や酸素を運ぶのは血液だけなので、
口座(財布)も1つに限定する。

全てのお金の流れがトレーサブル(追尾可能)となり、盗難や不正行為がされにくくなり、もし盗難にあっても、警察が調べれば分かるので、犯罪や詐欺が起きにくくなる。
その他、莫大な経費や時間が節減できる。

口座に上限額を設ける

② 口座に上限額を設け、それを超えた分は税として徴収される。

細胞が蓄えられる栄養や酸素の量には上限があるため、貯蓄高にも上限を設ける。
(腹いっぱいになれば、それ以上食べられないし、寝だめもできない。)

食欲など生命に直結した欲望は上限があるが、
名誉欲や支配欲には限りがない。
金銭欲に限りがないことが不幸を招いている。

月をまたぐごとに残高が1%ずつ減る

③ 口座の残高が月に1%程度ずつ減る。
（100万円は翌月になれば99万円になる。）
その減価分は税として徴収される。

赤血球が約120日で死に、また生みだされるように、
お金も徐々に減価する。
全ての物に寿命があり、劣化するのが自然の摂理。

お金には交換機能と貯蔵機能があり、両者は
トレードオフの関係であるため、貯蔵機能を弱める
ことが交換機能を高めることにつながる。
また、貯蔵機能を弱めることが仕事を独占したり、
奪い合ったりすることを抑止する。

全ての個人に基礎所得を支給する

④ 全個人に無条件で、最低限の生活に必要なベーシックインカム（基礎所得）を支給する。

全ての細胞に無条件で血液が供給される。
脳細胞は平均的な細胞の20倍の糖を消費する。
肝臓は通常の体細胞よりも多くの栄養や酸素が支給され、飲酒時などはさらに血流量が増加する。

完全なセーフティネットがあるので、みんなが安心できる。必要な分だけの仕事や社会貢献をしてプラスの収入を得れば、豊かな生活ができるため、奴隷的な労働に従事させられることもなくなる。

生体社会論

このように、人体の循環システムを経済に応用し、
さらに、脳の判断機能、神経伝達機能などを
社会に応用する考えを生体社会論と名付けた。

資本主義の考え方に捕らわれさえしなければ、
非常にシンプルで美しい社会システムである。
資本主義社会では、経済学者によって主張が
180度違うことも珍しくないが、生体社会論では、
完成された人体がモデルなので、主張のばらつき
が生じにくい。

解決される問題 ： 財政赤字

財政問題は、上限額の調整と減価率の調整により、容易に解決される。

例①
「1年後から、口座上限額を9800万円から、9700万円に引き下げます！」と国会で決議すればよい。

例②
「1年後から、減価率を現在の1.00%から、1.02%に引き上げます！」などと、微調整が可能。

解決される問題 ： 長時間労働

自動的に税が徴収されることにより、社会全体で約3割の労働が減ると予想される。
基礎所得による生活保障により、仕事を奪い合う必要がなくなり、社会で必要な仕事を分担しあうようになる。

週5日、1日8時間といった現代の正社員のような労働形態が一般的でなくなるだろう。
フレックスタイム制での勤務や成果主義が一般的になるだろう。
仕事が社会貢献に直結するため、高いモチベーションで仕事ができるようになるだろう。

解決される問題 ; 環境問題

長時間労働が解消されること、無駄な労働が減りほぼ社会に必要な企業活動のみが行なわれるようになることにより、環境負荷が激減する。

時間の都合で割愛するが、臓器は血液を受け取って、人体に必要な仕事を提供している。肺が互いに酸素を奪い合うこともない。
それを社会システムに応用すると、奪い合う競争をすることなく、独占価格になることも、多様性が失われることもなく、独占企業として、社会に必要な製品やサービスを提供できる。

解決される問題 ： 無駄な消費の喚起

企業は自社製品の消費を喚起。
大量消費に支えられ、必要もない仕事を生み出すことが利益となる資本主義が内在する矛盾。

必要もない工事をする建設業者。
必要もない薬を飲ませようとする製薬会社。
過剰な広告宣伝。
販売のための過剰な包装。
営業員のセールスのオーバートーク。
産地偽装や粗悪品を優良品に見せかける行為。
どこを見回しても、「消費しろ！」という看板やテレビコマーシャル。
電話勧誘や訪問販売。

解決される問題 ： 少子化問題

少子化による労働力不足の問題は解決される。
高齢者の生活を社会で支えることも可能になる。
基礎所得により、子供を産む経済的リスクもなくなり、かつ、男性の労働時間が減少することによる家事参加が促進されるため、出生率が増加する。

現代の少子化問題は、子供が少ないことそのものが問題なのではない。
付随する問題が発生することが問題なのだ。（労働力不足、高齢者の生活を支えることなど。）
少子化だけでなく、人口問題も解決できる。

ここが良くなる！：治安

基礎所得により、貧困が引き金となる盗難などの犯罪が減ると予想される。
逆に、金持ちが不正をしてさらに金を儲けるという犯罪も、この仕組みにより、欲望が抑えられ、減少するだろう。
振り込め詐欺のような犯罪も、お金の流れがトレーサブルになるため、皆無になると考える。

多くの犯罪に、金銭欲が絡んでいる。
このシステムにより、お金が支配の道具ではなくなるため、人がお金におおらかになると予想される。

ここが良くなる！；景気

資本主義社会は消費が冷え込むことが景気悪化を招く。
生体社会では、節約してもお金が循環する仕組みなので、景気は常に良い状態を維持する。

お金には、「交換機能」と「貯蔵機能」がある。
そして、その両者はトレードオフの関係である。
そのため、減価システムにより、貯蔵機能を弱めることは交換機能を高めることにつながり、人々が豊かになる。
もちろん、その景気はバブルのような性質のものではない。

ここが良くなる！；分業・利便性

得意な人が得意なことで社会に貢献しあうのが便利な社会である。
その分業が進むことは人々の幸福につながるが、低所得者は自分でできることは自分でした方が得なので、我慢する傾向がある。

低所得者は1時間の介護サービスをしてもらうお金を稼ぐのに、数時間働かなければならない。
しかし、このシステムではサービスの等価交換も容易になり、分業が進む。
資本主義での富裕層にはメリットがない。

ここが良くなる！；所有から利用へ

世界には1日1ドル以下で生活する人が12億人、2ドル以下は30億人と言われる。
他方、さほど必要もないブランドバッグや靴をいくつも持つ人もいる。高級なものを所有することが優越感を得る手段となり、自己目的化している。

生体社会では、高品質なものを所有しようとするのではなく、みんなで利用しようとするようになる。
それが「物」の価値を最大限に生かすことにつながる。お金持ちが偉いのではなく、社会貢献の総量が多い人が偉いのだ。
それは口座で確認できる。

生体社会論が描く未来像

税の申告や徴収が完全自動化されるので、
漏れなく、平等に、楽に税が徴収される。

全国の2万人以上の税理士が不要に。
面倒な企業や個人の税の申告作業も不要に。
消費税、所得税、相続税などが不要に。
面倒な割に、社会の公平性に寄与しない税の申告作業や税の学習から開放される。
社会の総労働量の減少につながり、人生を本来の目的に使うことができるようになる。

新しい社会システムと地域活性化①

新しい社会システムの企業は資本主義の企業と違い、利潤の追究が主目的ではない。
臓器がそうであるように、社会への貢献と企業で働く人たちを豊かにすることが目的である。（詳細割愛）

従って、利益が見込めない田舎にも、コンビニができ、ガソリンスタンドができ、中山間地域であっても、豊かに便利に生活できる。
田舎には雇用がなく、生活ができないという問題も解決される。

新しい社会システムと地域活性化②

地域にお金を呼びこむという発想はもはや必要ない。
より良い地域ができる副次的な効果としての経済効果ならば好ましいが、「いかに人を呼びこむか」、「観光客にいかにお金を落とさせるか」という方向性での努力は好ましくない。

全ての地域が「ゆるキャラ」などで、人を呼び込もうと資源を使うのと、全ての地域がそうしないのとではほぼ同じ結果ということになる。
それはハローワークや就職支援といった多額の税を投入している活動でも同じことである。
商工会の活動も、マクロな視点で見ると無駄が多いと言える。

新しい社会システムと地域活性化③

仕事のために都市に人口が集中するという流れはこの新しい社会システムでは弱まり、人口の過密は薄まると思われる。
巨大ショッピングモールも、小さい商店も、商品を流通させるという同じ社会の役割を担うもので、お金を奪い合う対立関係にはない。

新しい社会システム下では、雇用の問題や人口問題が解決されると予想されるため、勝ち組地域と負け組地域のような差別化は生じないだろう。
都市部も、コンビニの隣に他社のコンビニができ、客の奪い合いをするといった無駄がなくなり、ゆるやかな都市になるだろう。

生体社会論が描く未来像

原則としてデジタルな著作物を全て無料化し、貧しい人も全てのデジタルデータにアクセスできるようにする。

食糧が貧しい人にまで行き渡らないのは不幸なことだが、仕方がない側面もある。
しかし、音楽、文学、プログラム、映画、情報などのデジタルデータが貧しい人にまで行き渡らないのは、資本主義の都合によるものである。
それではデジタルデータの最大のメリットである劣化せず複製が容易に作成できるという性質が生かされていない。

生体社会論が描く未来像

細胞の中にあるDNA情報は一種のデジタルデータであるが、それは無料で容易に複製される。
ならば、生体社会でも、デジタルデータが全ての人に行き渡るようにするのが良いだろう。

当然、生体社会でも優秀なクリエーターがより多くの収入が得られる仕組みにすべきである。
その方法としては、ダウンロード数による評価、専門家による〇〇賞などの評価、ユーザーによる投票、好きなクリエーターへの寄付など、様々に考えられる。

それにより、人々の生活が豊かになる。

生体社会論が描く未来像

原則として、企業は独占企業である。

人体の臓器は互いに血液を奪い合わず、無駄な競争をせず、効率的に機能する。

企業は利益のためにではなく、社会のために存在し、人々はその企業を通じて社会に貢献し、報酬を得る。
独占企業にすると、商品の価格をその企業が恣意的に決め、消費者の利益にならないといった反論があるが、それは独占企業にすると競争がなくなるからだと言われる。
生体社会は競争のない社会だと誤解されるが、実は競争社会なのである。

生体社会論が描く未来像(競争)

綱引きのような、互いに奪い合う、引き合う競争は無意味である。
しかし、互いに高め合う競争は有意義だ。

残念ながら、資本主義社会は構造上、無意味な競争がはびこり、有益な高め合う競争が阻害される傾向がある。

無意味な競争の例として、保険会社や携帯電話会社、銀行などに見られる顧客の奪い合い。
銀行のオンラインシステムを各社で高いコストを支払って作成するといった無駄が生じる。

最後に

・質疑応答（Q＆A）。
・今後どのように、展開していくか？
・連絡先、ダウンロード先のお知らせ。

地域通貨との共通点と相違点

【共通点】

・通貨の減価システムは地域通貨でしばしば採用されるシルビオ・ゲゼルのアイディアを採用している。

・お金を人を支配する手段とせず、人と人とを結びつける手段とする。

【相違点】

・バイオミメティクスという基本思想に基づき、経済システムのみならず、社会の仕組みの最適化まで考えている。

・資本主義の補完ではなく、最終目的は資本主義を代替すること。

・生体社会論に基づく企業を起こし、その企業では新しい通貨で支払いがなされ、その通貨を使って社員が生活できるまでを目指す。

・ベーシック・インカム（ＢＩ）という思想を取り入れている。

・税を徴収し、その税を公共のために使う。

経済論から社会論へ

人体の仕組みを応用するという試みは社会へも応用可能である

・血液＝お金、細胞＝国民、臓器＝企業として、持続可能な経済の仕組みを考えてきたが、これはさらに応用可能である。

・臓器が血液によって生かされ働く仕組み、肺や腎臓が血液を奪い合わず、協調して働く仕組み、肝臓や胃など、仕事が多い時により多くの血液が供給される仕組みなどを応用した、新しい企業論が構築されている。
（今回は時間の都合で割愛。）

・脳の判断システムは政治システムに応用でき、神経伝達システムはメディア論につながる。

この生体社会論という仮説をさらに、深く知りたい方へ

賛否両論あるかと思います。
ご意見、ご感想は、 tomo.ozaki@gmail.com
までお寄せください。

このスライドはパワーポイントで作成しています。
このスライドのデータが欲しい方は下記から
ダウンロードできます。
http://www.s-society.org/os/downloads.html

生体社会論の概略を説明した動画があります。
「みんなが幸せになる経済と社会のしくみ」で検索してください。

この生体社会論に未来や希望を感じられた方は、
名刺交換やSNS(facebookなど)で情報交換していただけ
れば幸いです。

ご清聴、ありがとうございました。

新しい社会システム研究家　尾崎 智仁